
素直さへの祝福

Tsunaki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直さへの祝福

【著者名】

Tsunaki

N6465H

【あらすじ】

年上の幼なじみはいつも意地悪で…大好きな気持ちを伝えられなかつた。その日あたしは確かめてみたんだ。彼のあたしに対する気持ちを…

(前書き)

少しずつなれでは来ましたが、まだまだ未熟です。
を励みに精進しますので、よろしくお願いします m(_ _)m

感想や評価

「ほう……」

この上なく整つた顔にこの上ない嫌味な表情を浮かべて、5歳年上の幼なじみはあたしを見下ろしていた。

「何よ……！」

あたしより10cmは高いだらう長身の彼を見上げるのは骨が折れるが、負けたくないのでは目は逸らさない。
彼、五十嵐 晓イガラシサトルは嫌味な表情を不適な笑みに変え、その長い指であたしのあごをクイッと上げさせた。

「茜音なんかに告る物好きがいたのか…」

そしてあたしの手を見据えてトドメの一言。

「世も末だな。地球最後の日かもしれないぞ？」

むつかあ！！

暁の手を払いのけたあたしは出来る限りの怖い目で睨んでやつた。そんなあたしを小馬鹿にしたように一瞥すると、暁はライターを取り出してタバコに火をつけた。そして、一言。

「それで？」

形のいい唇から白い煙がスウッと出していく。

「なんでそんな事を俺に言つんだ？」

うつ……！

「ごもつともです。なんだと聞かれればそれまで。返す言葉が見つからない。

だけどちゃんと理由はあった。恥ずかしくて言えないだけで。

「そ……それは……」

手近にあつた灰皿にタバコを押しつける。そんな彼の手元ばかりを見てしまつて顔が見れない。

言わせないで察してよーなどと理不尽な事を考へていると、その声は容赦なく降ってきた。

「お前が誰と付き合おうと、それはお前の勝手だ。いちいち俺に報告するな。」

-お前の勝手だ…-

分かつてはいたけど、悲しくなってきた。

暁は成人している。立派な大人だ。

あたしなんて、相手にするはずない。

いつも意地悪で口悪くて、多分よくある

「妹の様に」すら思われていなかつたのだろう。

でも、いつも最後には助けてくれて絶対味方でいてくれる暁が大好きだった。

嫉妬して欲しくて、言つたんだよ？

もしかしたら、暁もあたしの事…なんて下らないこと考えて。

暁にとつてあたしは、やっぱりただの幼なじみだつたんだ。

分かつちやつとたん泣けてきて、あたしはその場から逃げ出していた。

気が付いたらもう夜で、空に星が瞬いている。

随分、たつたんだな。

携帯の画面には21時19分の表示。

全然気が付かなかつた。

もう3時間もたつていたのか。

場所は見たこともない公園で、ひとつこひとりいない。

長年の片思いにアッサリ終止符を打たれて、涙が止まらない。

少しだけ、希望を持つてたのに。
バカだつたな、あたし。

「ニヤー」

ふと、小さくか細い鳴き声がした。声のした方をみると、そこには大きな藤の木が立っていた。

沢山垂れ下がつた太いつるのうちに一本にクロブチの子猫が見える。登つたまま降りられなくなつたのだろう。手をのばせばなんとか届く距離にいた子猫に、手を伸ばす。

その時、

「茜音……」

後ろから呼ばれたと思つと、温かな体があたしを抱き締めた。

荒い息。

強い腕の力。

最初那人だと思えなかつた、それは暁だつた。

「さ……とる？」

呼ぶと更に力がこもる。

窒息しそうな程強く、暁はあたしを抱き締めていた。

「お……前、なにしてんだよ……俺、まじビビつた……」

途切れ途切れに何を言つているのか。

「何つて……あの子。」

藤のつるの上で鳴く子猫を指差すと、一瞬暁は固まつたように感じた。

「んだよ……それ……俺、お前が首吊りそうに見えて……それで……」

大きく息を吐くと、暁は少し腕の力を弱めた。

「ばつかじやないの！？」どうやら、藤のつるに手を伸ばしている影が、首を吊りそうに映つたらしい。

アホだ。

「……。」

突然黙ってしまった暁。

怒つたのかな？

「暁…」

「俺は」

あたしが呼んだ彼の名前は突然話しだした声に遮られた。

「お前が産まれたとき、俺は五歳だった。」

突然、そんな話ができる。

不思議に思ったが、あたしは黙つて聞くことにした。

「小さくて、柔らかくて、さわつたら壊れそうなお前が可愛くて、俺はいつも傍にいたんだ。」

そんなとこ、知つてる。

あたしの写真には、いつも隣に暁がいた。

産まれたとき。

入園式。

入学式。

卒業式。

なんだかんだいって、節目にば一緒に写真を撮つてくれた。

大好きだから、嬉しくて…写真の中のあたしは、どれもどびきりの笑顔だった。

「ずっと、子供だと思つてた。ちまちま歩く可愛い少女なんだって。

」
暁が、緊張しているのが分かつた。

あたしを抱き締めている手が、前で組まれている。

手を組むのは、緊張した時の暁のくせ。

「…違うんだ。お前は、いつのまにか女になつてた。…俺が、惚れて夢中になるくらい魅力的な。」

え…？

思考回路が停止した。

いま、確かに

「惚れて」つて…

「知つてたか？俺が焦るとタバコ吸うの。お前、告られたつて、やっぱもう子供じゃないって思つたら焦つちまつて…」

ハハ…と暁が笑つた。

顔が、熱い。

多分いまかなり真っ赤だ。暁が腕の力を緩め、あたしと向き合つた。

「俺に、しろよ。」

どくん、と。

心臓が大きく脈打つて、声が出ない。

暁の顔が近づいてくるのを避けないのが、あたしの返事。

暁のせいで、沢山泣いた。

だけど、これからは沢山笑わせてくれるんでしょう？

長かつた片思いが、末永い両想いになつたこの時を、いつの間にか
降りた子猫も祝福してくれているようだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6465h/>

素直さへの祝福

2010年12月4日14時50分発行